

# 狩俣地域の井戸造り

～水の確保に苦勞した人々～

佐渡山 正吉 (博物館協議会委員)

はじめに

狩俣に渡来し定住した人々の集団は、伝承や諸資料によると三つの小集団から成っている。①ウブグフムトゥ、②ナーمامトゥ、③シダディムトゥ (同系統に④ナーンミムトゥがある)。それらの小集団はそれぞれの始祖神をもつ祭祀集団を構成しながら村落レベルでひとつにまとめられ、ウブグフムトゥの始祖神を最高神として村落全体の祭事組織を構成する。ウブグフムトゥの祭神が最高神に位置づけられのは、狩俣に初めに渡来し村立てをした祖神とされているからである。

この四つの祭祀集団はユームトゥ (四元) と呼ばれるが、①のウブグフムトゥ③のシダディムトゥ④のナーンミムトゥは、その渡来定住の過程において水と深くかかわりのある興味深い伝承を残している。

宮古島の北端に位置する狩俣集落は、その地理地質等の環境の特性から水資源に乏しく、恒常的な水不足の暮らしが昔からつづいたところである。降雨量の少ない時期になると飲料水の確保もままならず、婦女子は深夜にも井戸に通い、順番待ちで水質の悪い井戸底の少ない水を汲み上げた。このような水事情は上水道がひかれるまでつづいた。

暮らしに不可欠な水の確保に難渋した地域は狩俣だけではない。とくに周辺離島の

池間島や大神島では、ときには飲料水を宮古島から船で運ばなければならない切迫した事態も起こった。宮古各地の集落は、集落の位置する土地の地形地質等の自然環境の違いによって取水の方法や利用の仕方は必ずしも同じではなく、それぞれに自分の土地に見合った方法で日常の水利を考え、暮らしと水の歴史を編んできた。宮古の各地に、水に関わる先人の努力の跡をみることはできるが、本稿では狩俣区域の範囲において、水を確保するためにどのように地形利用を考え、どのような方法で井戸造りをしてきたのか、個々の水源地の現況と伝承、史料をもとに考えてみたい。

## 1 ズーガーの井戸

平良側から県道に沿って狩俣集落にさしかかると、集落の入り口にコンクリート造りの門があり、その手前に石垣で円形に囲った縦穴の井戸が見える。地元でズーガーと呼ばれ、村立ての由来話に出てくる井戸である。水に関わる祭祀では、もっとも大事にされているところで、ここの水は上水道が普及するまで産湯に使われた。

宮古の方音では地はズー、井戸・泉はカーまたはガーである。これにしたがえば、ズーガーは「地の井戸」「地の泉」となるが、まずは先人が名付けたこのズーガーの名称について、命名の背景や由来などを述べて

みたい。

### ① 渡来人 水源を発見する

昔、狩俣に渡来し定住した小集団のひとつに、今のシダディムトゥ・ナーンミムトゥ系統の先人がいる。狩俣にたどりつくまでの経路を神歌「舟んだぎつかさのタービ」で見ると「…兄妹神が守姉ともども舟に乗り、寅の方の風をうけ大海を渡り大神島に着いた。その後大神島を離れ、宮古島北端の世渡崎をまわってカース道（集落南方の農道）から上がってきた。途中で休んでいると、近くのユーナ山（オオハマボウ群落）から、水にぬれた鳥が舞い上がったので、早速ユーナ山の本をなぎはらってみると清水が湧いている。この水をもとに村立てをきめ、近くのナーンミの地に家を建て、守姉を住ませ水番とした。兄妹はそこからさらにシダディの地に行き、そこを永住の地と定め、子孫繁栄の基をつくり、ユーヌヌス（世の主、農業神・豊穰の神）になられた」と謡われている。渡来した人々が途中で休んだという場所は、現在の狩俣駐在所の南側で、そこは以前は小高い石灰岩の丘であった。

このような由来で、今の狩俣村落の祭事組織の重要な骨格をなすユームトゥ（四元）の内の二つのムトゥが生まれ、それぞれの祭神であるユーヌヌスとミズヌヌス（水の主・水神）が祀られるようになるのである。渡来人が発見したユーナ山の泉が、いわゆる今のズーガーで、そこは元々盆地状の低地・凹地をなし、周りからの地表水が流れ込む水溜まりで、周辺にオオハマボウが繁

茂し水源を覆っていた。そのような状況から「地の泉」の意でズーガーと呼ばれるようになった、と推理できる。現在のズーガーの外観は、縦型の掘りぬき井戸の観があるが、水源の発見をうたう神歌の詞をたどれば、その成立は掘りぬきでないことは確かである。

### ② 泉水の利用 石段を造る

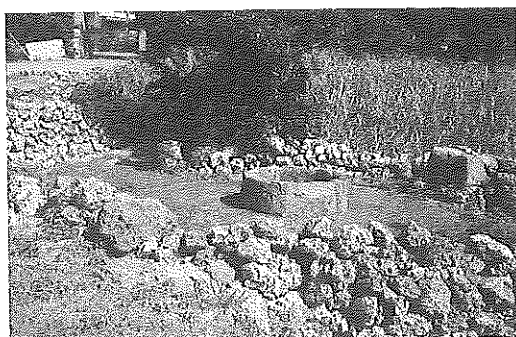
人間の「暮らしと水」の歴史を考えると、いつの世でも人間は「どうしたら楽に水が得られるか」「どうしたら楽に水が使えるか」と水利環境改善の欲求をもち続け、そのためにいろいろ工夫をこらし努力を重ねる。水の確保が不便な所ほどその思いは強い。

ズーガーの水源を発見した先人は、このような人間本来の欲求を少しでも解決の方向にもっていくために具体的にどのような事をしたのか。伝承や現存の事物をもとに先人の知恵と努力の跡をたどってみたい。

現地に立って周辺の地形をみれば自ずから納得のいくことだが、ズーガーの位置は、周囲の地形から見て緩やかなV字形の底の部分にあたる。そこは降雨時には周囲から地表水が流れ込み、同時に広範囲にわたる地下水が浸透してできる泉となる（図1）。ところで、この深い凹地の底にある水を、日常に汲み上げて使うのはかなりむずかしい仕事である不便で難儀な水汲みの状態を改善するためには、水元に降りる足場をよくし、水運びの安全を図らねばならない。

こうして石段構築工事が始まったと推測されるが、残念ながらいつ着工されたのか、

年代は特定できない。土木工事用具の未発達のため、相当の労力が投入され長期にわたったと思われる。村の生活共同体の労働をもって実現したズーガーは、形態的にはウリガー（降りて取水する井泉）である。石段の数は22段、ウリガーでの水汲みは大正末期までつづいた。『雍正旧記（ようせいきゅうき）』（1727年）にはズーガーは「津里井」と見え、「いつ掘られたのかわからない」とある。ということは1727年の時点よりはるか以前に石段造りのウリガーとして整えられたことが考えられる。数百年もの間、狩俣の人々は石段を上り下りしてズーガーの水を利用したのである。



ズーガー

### ③ 現在の井戸の形ができる

ウリガーは水汲みの難儀もさることながら、地表水の流入による水源の汚染もある。これらを改善するために大がかりな改修工事がおこなわれ、現在のズーガーの形になった。施工は図3のように、初めに井戸底の泥土をさらい石灰岩の岩盤を掘り下げ、岩盤の上縁から円形に石を積み上げながら、同時に周りを外側から土石で埋めていく。この方法で予定した井戸口の高さまでもっていき、比較的大きめの孤状の石で縁取りをし積み上げの工程を終る。石積みの技法は主に布積みの工法がとられている。井戸口をのぞきこみ、円形状に積まれた個々の切り石やその接合を見ると、素人目にもかなり高い石工技術であることがわかる。

井戸口の立ち上がり部は砂岩を加工し、5箇の弧状の石で組まれている。後述するンミャーの井戸も、井戸口は5箇の砂岩石で組まれているが、5の数にはなにか意味があるのかないのか、その辺はわからない。井戸の周りを石垣で囲い、集落側に向いて門を開く。入口幅1.8メートル、門の高さ1.3メートル、これだけの規模の構えをもつ井戸はほかにはない。それは村落の

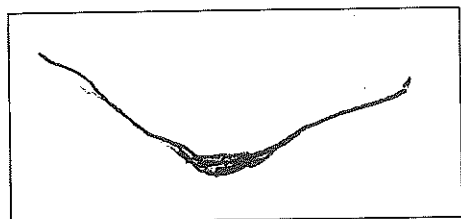


図1 原初の形態

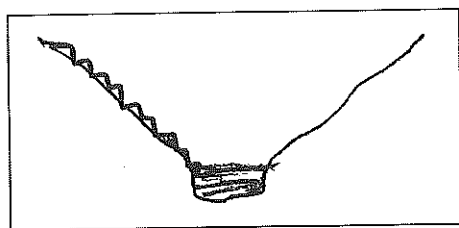


図2 石段設置

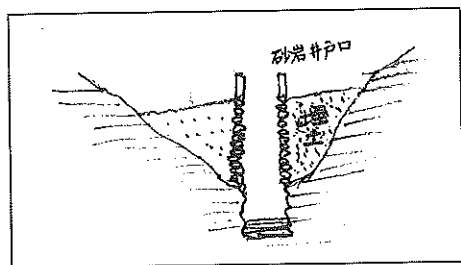


図3 縦掘り型に改築

水の祭祀の主祭場であり、それなりの相應しい格式を求めたい村人の心情の表れかもしれない。最後にこの所の神・水神を祀る位置をきめ、石の香炉を置いて祈願の場所をつくり、尽きない水の恵みと豊穰を祈る。

こうして先人の汗と知恵をもって築かれたズーガーの水は、村に新しい生命が誕生するたびに、祖先の霊力をもつ清らかな水として産湯に用いられた。それは今の上水道が狩俣に開通する1965年までつづくことになるが、私もズーガーの水を産湯に使ったひとりである。

私は若い頃、青年会活動の一環として毎年おこなわれる井戸さらいの仕事に参加し、井戸の底に降りたことが数回ある。作業は雨の少ない時季におこなわれた。底の部分は案外広い。膝が没するほどたまった赤泥土を、上から吊り下げられたバケツに入れる仕事が延々とつづく。泥土を除くと岩盤の隙間から地下水が湧出し流入しているのが見える。数条の水筋のうち、もっとも多いのは北東側からの流量である。泥さらいをしながら周りの岩肌を見、手で触る。先人の手の跡から何かが伝わってくる感じがする。それは懸命に振る鎚音のようでもあり息遣いのようでもあったが、井戸底で味わった青年期の貴重な経験は忘れがたいものがある。

藪の中から飛び立った鳥の羽がぬれているのを見て水源を発見し、村立てをしたという伝説は、狩俣と同じ話型で下地町来間島にもある。大昔、来間島は津波に襲われ、

海岸近くにあった村はことごとく流されて無人島になった。その後、浦島や川満原が戦乱で四散したとき、安住の地を求めて兄妹が島に泳ぎ渡って来た。高い所で周囲をうかがっていると、山の麓から雀が飛び立った。その羽がぬれているのを見て水のありかを知り、永住の地と定め村立てをしたという、今の来間井にかかる由来話である。

## 2 各地の井戸

### ① ンミャーヌカー

集落の東側は地元で「ンミャー」と呼ぶ小字「宮川原」である。そこに井戸がある。ここの地形も盆地状で、井戸の造り方は前述のズーガーと同じ工法であることは、周囲の地形からみてそれとなくわかる。井戸の口径70cm、深さ4メートル、井戸口から中をのぞいて内壁を見ると、ズーガーと同じように、石の積み上げ部分と石灰岩層の掘込み部分に分かれている。

『雍正旧記』の狩俣村の項に「ミヤ井但雍正二甲辰年掘ル」と見えるのはこの井戸のことで、1724年に掘ったとあるが、元は降雨時に池沼と化す取水に不便な凹地に、前述のズーガーのような造りかたで今の井戸が造られたものと思われる。

### ② アマガー

集落入口の南方約200メートル、畑に囲まれた凹地の草むらに覆われてその井戸はある。以前は農道脇の便利な場所であっ

たが、農地整理で周辺道路が大きく変わり、井戸水も使用しなくなったため、今はその存在すら忘れられてしまった。おいしい水だからアマガーと呼ばれたこの井戸の別の名はソーミーガー（新しい井）である。その名のとおり、掘られた年代は新しいとみえ、周辺地形は前述の両井戸と同じであっても、岩層の違いによってここは地表から直接の縦掘りである。井戸掘りの技術が発達し、専門の職人が現れた時期の造りにちがいない。

昔、マギツミガという機織りの上手な女人がここの水の近くに住み、美しい織物を織ったという伝説があるが、その女人の屋跡のイビは、今も井戸の東側にひっそりとある。現在のアマガーの凹地には、遙か遠い昔からおいしい水があった。ここをもっと掘り下げれば、さらにおいしい水が豊富に得られる。そう考えた後の世の人が、衆議を集めて掘ったのが今のアマガーである。

### ③ パリガー

狩俣地域の地形は小規模の起伏が多く、盆地状の低地は湿地と化し水溜まりができやすい環境である。土地の保水力がきわめて低く、水の不自由な狩俣地域にとっては、低地の水溜まりは貴重な存在で、牛馬だけでなく野良仕事をする人の飲み水ともなった。集落から遠距離に耕作地をもつ人は、往還の苦労を少しでも軽くし生産を高めるため、耕作地の傍らに小屋を作り、数日寝泊りして畑仕事に精出した。そういう人た

ちにとっても凹地にできる溜り水や湧き水は大事な生活用水である。この水源を大事にし、取水の便利を考えて造られたのがいわゆるパリガー（畑の井）ヌーガー（野の井）で、形態は粗雑であっても、構築法は底部からの石積み上げである。

狩俣地域のパリガーでよく知られているのが集落北西のイキヤーガー（池田井）、南のフタズガー、サバラガー、遠く離れたナスカー、ウーギスカー、アブガーなどである。

### ④ ユスマヌシュウ（四島の主）の井戸

四島の主は1500年ごろの狩俣の人で狩俣、島尻、池間、大神の4村落の統治を任せられた人徳のある政治家として知られる。狩俣から平良に通じる道沿いの数カ所に、休み所を造り井戸を掘り、人々の往還の苦労を和らげ便宜を図ったといわれるが、その井戸の位置はやはり凹地の中心部にあり、水源の探知選定、井戸の構造に一定の共通性がみられるのは興味深い。狩俣中学校前方のスガミヌカー、県道から島尻集落に分岐する学道線に近い「四島の主の墓」前にあった井戸（いまは無い）、大浦湾付近にあってイイヌカー（西の井）と呼ばれる凹地の井戸（大浦では四島の主が造らせた）と伝わり現存。これらの井戸は皆、凹地の水溜まりを掘り下げて造った井戸である。

### 3 集落裏の海岸 崖下の湧泉利用

大浦・島尻方面の東方から渡来し、裏海

岸崖下の湧泉イスッガーを発見して村立てをした人たちは、村の始祖神として崇敬されている。イスッガーは波打ち際に近い上方の大きな岩陰にあり、水質はいいが水量は多くない。名称のイスッガーは「磯の井」ということ。そのイスッガー東側の波打ち際に、地元でクスヌカーと呼ぶ井戸がある。クスは「腰」で「うしろ、後背」の義。集落の後側、後背地に位置することからこの名で呼ばれ、ウプグフムトゥ系の人たちによって構築されたと伝わっている。

ここでは初めにクスヌカーについて述べ、つぎに同じ裏海岸域の類似の崖下湧水の利用について述べ、水の不自由な狩俣地域の水事情とあわせて、先人の水源開発の努力の跡をたどってみたい。

#### ① クスヌカー

狩俣のウプグフムトゥは、村のすべての祭事を統括するムトゥで、祭祀行事の中心になるが、ここで唱えられる神歌「祖神のニーリ」にクスヌカーの井戸造りのことがうたわれている。「ウプグフトゥヌ（大城殿）が、クスヌカーの井戸を掘りたいと、初めは縁者に相談し村の衆に呼び掛け、手斧、大斧を使って掘ったら、清水、あま水があふれ出た。あまりの嬉しさに、村中の者が神酒を持ち寄り、ウプグフに集い、四日三晩お祝いし、ウプグフトゥヌを讃えた」以上が神歌の大意である。

時代はかなり古いと思われるクスヌカーの井戸造りが、どのような手順でおこなわ

れたか、神歌の内容から読み取るのはむずかしいが、現地で実際にその形状や周囲の地形、海に流れる地下水の湧出口の位置など、詳細に観察すると、元の自然の状態や今の形になるまでの作業工程が大体察しられる。

井戸は深さ3.5メートル口径約2メートルで、砂浜からわずか7、8メートル上がったところにある。元々波打ち際に近い崖下から湧き出ている水を、浜の上の方でせき止め、水口部分を掘り込んで周りに石を筒状に積み上げて造ったものと思われる。

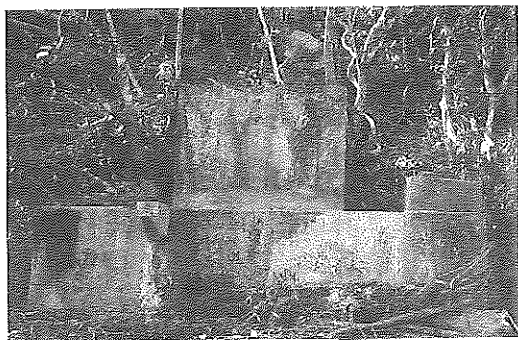
この水は、古い時代から大正末期まで、旧暦5月ごろにおこなわれるシツ（節）の祭事に、村の娘たちが早朝の海でみそぎをしたあと、バーミズ（若水、若返りの水再生の水）として浴びた水でもある。

#### ② ンナグズクスのタンク（ンナグズの後ろの飲料水タンク）

ンナグズは狩俣集落内の東部にある里の名で、民謡で歌われるイサミガの生地である。このンナグズ里の後ろの丘陵を越えて崖を下ると、崖の中腹から流出する地下水を貯めるコンクリート造りのタンクがある。狩俣に上水道が引かれるまでは、水質の良い水量の豊富なこの泉水は村の重要な水源で、場所が水浴びにも都合がよかったからとくに若者には人気があり、水桶を頭上にして険しい崖道を往来する若者の姿は、夏場はとくに多かった。

タンクの正面には「飲料水タンク 昭和

五年四月建設」と刻まれている。今もそうではあるが、ようやく人ひとりしか歩けない険阻な崖道を、どうやって建材を運んだのだろうか。場所が場所だけに、人力に頼るしかないことはわかるにしても、労務に携わった人々の苦労は並大抵のものでなかったであろうことは、現場の状況から十分推察できることである。崖腹から出る水を濾過槽を通してタンクに貯留し、つるべで汲み上げる。「飲料水タンク」とはあるものの、ここは思う存分清水が使える洗濯場、水浴場でもあった。



ンナグズクスのタンク

### ③ アラーンのタンク

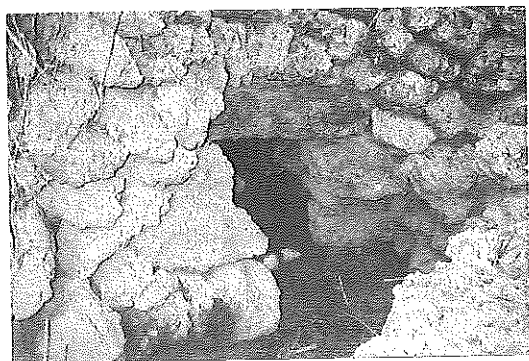
ンナグズクスのタンクから崖道を下の海に下り、浜伝いに右手へ200メートルほど行くと、浜を少し上がったところに水タンクがあり「昭和五年六月 建設」とある。ということは前記のタンクが4月竣工だから、引き続きこのタンクが着工され、工事に2カ月を要したこともわかる。湧水口が崖の下部にあるのでタンクの構造は前記のタンクとは異なり、より便利な造りになっていて余剰水は地表を海の方に流れる。このタンクも水質が良く豊富な水量で、利用

者はンナグズクスのタンクより多かった。というのは、集落側からの道も海側からの道もそれほど険阻ではなかったから、洗濯や水浴のほか、前方の海で漁をしたあと、帰りに水浴びをする人は多かった。

湧水口は古い時代の構築のようで、砂岩の自然の平石を上部にのせ、しっかりした水口の造りになっている。全体を観察して考えられることを、年代順においてみると、原初は崖下の細い流水、それを水口を広げ、上部と両側の土止めと補強のため石で固める。これが現在観察できる水口の構築であろう。同じ時期、石で囲った水場が造られたが昭和5年6月、今の構造に改築された。このような変遷が考えられる。



アラーンのタンク



アラーンのタンク湧き水

#### 4 掘りぬき井戸

遠い井戸に通う水汲みは辛い。身近に水源が得られたらこんな幸せはない、と日常の用水に不自由な狩俣の人々はおもう。時代は明治末から大正期、宮古には沖縄本島から井戸掘り職人がやって来て各地で頼まれて井戸を掘った。以後その掘削技術は島内に広まる。狩俣集落内に幾つかの掘りぬき井戸が見られるが、その多くは井戸掘り職人の手による井戸で、わりと新しい時期の井戸である。

・マヤーガー ・ニスヌカー ・マイニャーガ ・ンカバリガー ・パイヌカー  
・ウプヤーガー ・キタジャーガーなど、これらの井戸は村の人々の大事な水資源として生命をつなぎ暮らしを支え、人々の交流の場ともなる貴重な存在であったが、上水道の普及にともない、今はその役目を終え静かにそこにある。宮古では、たとえ用をなさない古井戸であってもそこを埋めてはならない、埋めたら災厄がかかるという水に関わる民俗信仰がある。どうしてもその場所を埋めなければならない事態になったときはどうするか。とにかく井戸から生じる水の気を閉じこめてはいけないわけだから、井戸口にパイプを差し込み地上に幾分出して外気と通じるようにする。このようにして不用の井戸の上に施設を造り、効率的に土地を利用している事例は平良にも数例みられる。

#### 5 終わりに

往古、狩俣に渡来し定住した人々は、初めは自然の状態にある水で生命をつないだ。その水は凹地の溜り水や岩陰の小さな泉、あるいは崖下から細く流れる地下水であった。その後時代が進み人が増え、村全体の労働力の高まりとともに人知も発達してくると、個々の暮らしの安定、共同体の生活基盤の整備等について人々の意識が高まり、現状改善の願いが強くなる。こうして共同の知恵と労力の総和によって、暮らしに不可欠な水の問題は次第に改善されていくが、生活共同体のそのような活動の軌跡を、私は生地狩俣集落の「暮らしと水」の歴史の中で考えてみたいと思ったのである。

水資源開発に取り組んだ村の先人たちの努力は、何も狩俣に限ったことではない。宮古全体の村々が乏しい水資源を大切に守り、それに頼りながら時代の進展にともなう水利の歴史を編んできた。狩俣よりもっと厳しい水事情に喘いだ島々もあるが、古里狩俣のいにしえの姿をもっと知りたい心情もあって、あえて視野の範囲を狩俣地域とした。地域の水環境の変遷はとりもなおさず自分の暮らしの変遷と重なることでもあり、見聞きしたこと経験したことなども併せ、狩俣の水事情の変遷をレポートした。

(さどやま まさよし)